

INFORMATION

「FAN みそ！」コヤーラ・クラブ会員が活躍 DWF コヤーラ人形公募展枠の出品（報告）

本年6月に予定していたチーム・コヤーラの「DWF コヤーラ人形公募展」はコロナウィルスによる影響から開催を中止いたしました。その後、緊急企画「FANTANIMA!&MISOROGI クロスオーバー展 FAN みそ！」（羽関オフィス）の8月開催の取り組みが決まり、公募展のために制作された作品の発表の場として応募者限定で出品枠を設けました。審査を経て小林久仁子さん、柴崎弘子さん、ゆきちさん、原田万紀さんが参加作家として出品、それぞれにとって公募展とは異なる実践の評価の場となりました。「FAN みそ！」にはコヤーラクラブ会員で公募展出身の風らい坊さん、細貝まいさん、shiro さん、新家智子さんも出品、販売でも先輩作家と並んで実績をあげています。皆様の今後の活躍が期待されます。
（「FAN みそ！」8月19日～9月1日 丸善丸の内本店ギャラリー）



小林久仁子「新月夜」 柴崎弘子「精霊」



原田万紀「月下美人・赤」 ゆきち「のある」



風らい坊さんも公募展出品予定だった「精霊」を出品



コヤーラ・クラブ入会条件

入会金なし 年会費 2000 円（更新時に2年分一括払いの方は3900円になります。）
年4回、チーム・コヤーラのニュースレター「KOYAALA 通信」が届きます。
KOYAALA 通信発行時期 1月1日、3月1日、6月1日、12月1日

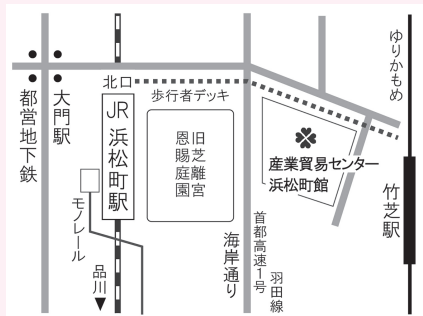
お申込方法

ゆうちょ銀行の振替口座に年会費 2000 円をご送金ください。
口座名 チーム・コヤーラ
ゆうちょ銀行から 00140-7-358370
他銀行から 〇一九店（ゼロイチキウ店）0358370
※電信送金の方は「〒番号・住所・お名前（本名）・電話番号」もあわせてお知らせ下さい。
・ご入金が確認ができれば、チーム・コヤーラ事務局から最新号と受領証を兼ねた会員証をお送りいたします。次号の発行が直近の場合は、翌号からお送りいたします。
・更新時には、有効期限となる号に更新のお知らせと振替伝票を同封してお知らせいたします。

ドールワールドリミテッド ネイチャーアニマルワンダーランド併催



11月29日（日）13：00～17：00
東京都立産業貿易センター 浜松町館（東京都港区海岸 1-7-1）
創作人形、アンティーク、レプリカドールやぬいぐるみ、雑貨や素材の展示販売
主催 ドールワールド NAW 実行委員会
※新型コロナウイルスの感染拡大状況によっては中止になる場合もございます。詳細は HP にて。
<http://dwf.d.doood.jp/>



※今回の会場は
産業貿易センター
「浜松町館」になります。
ご注意ください。

ロシアとチェコ 海外展示取り組み中止

前号でお知らせしたロシアとチェコの出展をご案内する羽関オフィスの取り組みですが、コロナウィルスの影響から冬の予定の確定が難しく、本年は中止することにいたしました。「ドール・プラハ」（チェコ）と「ART OF DOLL」（ロシア）の両主催者からは 2021 年に日本の参加者と再会できることを楽しみにしているとのことでした。来年の取り組みは状況が安定次第、お知らせいたします。

DM 同封希望の方へ（次の発行日から3ヵ月の間に展覧会を予定されている方）
事務局に枚数とメ切をお問い合わせのうえ、発行日の10日前までにお送り下さい。発行後に請求書をお送りします。
同封料金 コヤーラ・クラブ会員 2000 円 一般（非会員）3000 円

個人情報について

お預かりしている個人情報はチーム・コヤーラの事務局業務を担当する羽関オフィスが厳重に管理いたします。名簿は「KOYAALA 通信」発送に使用させていただく他、チーム・コヤーラの趣旨に沿って有意義と判断した情報を伝達する以外には一切使用しません。チーム・コヤーラ以外の第三者が閲覧・使用することはありません。

チーム・コヤーラ事務局
189-0003 東京都東村山市久米川町 3-27-57 羽関オフィス内
TEL 042-395-7547（担当 はぜき）
URL <http://koyaala.jp> Email team_koyaala@yahoo.co.jp
KOYAALA 通信 編集責任者 羽関チエコ
© KOYAALA TSUSHIN 2020, printed in Japan 本地記載の記事・画像の無断使用・転載を禁じます。

KOYAALA 通信は、チーム・コヤーラがコヤーラ・クラブ会員に発行するニュース・レターです。発行日 3月1日、6月1日、9月1日、12月1日

なぜ人形は少女なのか

榊山裕子

最近の創作人形展では作る人も、見る人も、自然に少女の像を求めています。ひとがたの対象は多岐にわたりますが、なぜ少女、さらに関節人形なのでしょう。この問いをテーマに、批評家（芸術批評、ジェンダー・セクシュアリティ論）の榊山裕子さんに執筆して頂きました。榊山さんは『DOLL FORUM JAPAN』で「ベルメールから」を連載執筆、人形についても深い考察をされています。

人形制作・撮影 秋山まほこ

「なぜ人形は少女なのか」という編集部から提案された今回のテーマの「人形」とは、日本の創作人形のなかでも現在とりわけ人気の高い球体関節人形のことである。球体関節人形には「少女」が多いのだという。たしかに日本の球体関節人形には、比較的胸も薄く成人女性というよりは女の子に近い身体の人形が多い。しかしそれは少女なのかといえば、西洋的な成人女性を連想するならばたしかに未成熟には見えるものの、日本にはこうした薄く小柄な身体や、自我を半ば見失ったような眼差しの成人女性は日常的にしばしば見受けられる。むしろことばによる「少女」というお約束がそこでは先行しているようにもみえる。

いずれにしても、球体関節人形は「少女」＝「年若い

女の子」（広辞苑）の玩具ではない。それらは繊細に作られた高額な一点ものの創作作品である。この球体関節人形に影響を受けて量産された「スーパードルフィー」に代表されるカスタマイズドールも、一体数万円以上はする。球体関節人形は現実の少女よりも高い年齢の女性や男性によって「愛好」されてきた。「少女が人形で遊ぶ」のではなく、「大人が少女の人形で遊ぶ（人形を鑑賞する）」のである。

球体関節人形の写真集も大人向きで、その装丁も写真もエッセイも一種独特のレトロで耽美的な雰囲気を出しているが、その文化的傾向の道筋を開いたのは澁澤龍彦であろう。澁澤は1960年代にハンス・ベルメールの写真作品を「関節人形」として紹介し、ピグマリオニ

ズムの翻訳としての「人形愛」という言葉を広めた。澁澤による「女を一個の物体に出来るだけ近づかしめようとする」「少女コレクション」としての人形愛のエロティシズム論は、第二波フェミニズムや、セクシュアル・マイノリティによる運動が勃興する 1960 年代から 70 年代にかけて書かれている。それは当時、「欧米」からもたらされた性解放論の風潮の影響を受け、異端的な雰囲気
に擬似的な新しさを打ち出しながらも、その「エロティシズム」観では異性愛の男性中心主義が堅持されていた。それゆえにか、のちに『エロティシズム』（1967）の中公文庫版（1984）のあとがきで澁澤は自ら「いま読み返してみると、女性に対してかなり辛辣な意見があって自分でも驚くほどだが、これも現在の私の意見とは認めがたい」と書くことになる。

澁澤流のエロティシズムと当時の「性解放論」との違いについては、種村季弘も 2003 年に興味深いことを書いている。彼は澁澤が責任編集した「エロティシズムの雑誌」『血と薔薇』（1968 – 1969）が、当時の性解放論などの「時代思潮の影響」を受けながらも、「まったく対極的な方向も打ち出していた」と回想している。それは「一口にいえば」『『コードモノクニ』の世界』だというのである。「コードモノクニ」は、大正モダニズムの影響を受けた教育的かつ芸術性の高い、戦前の中産階級の子弟向けの子供雑誌である。種村によれば彼らの「子供部屋、コードモノクニは、一度戦争で破壊され焦土と化してしまった」のであり、その世界観は座礁を運命づけられた「永遠の少年たちを乗せた愚者の船」であった。戦後のセクシュアリティへの彼らの違和感はそれが「ここにある現実に地続きである」からであったという。しかし彼らの「エロティシズム」観は戦後世代にも影響を与え、戦後の現実から目を背けるための免罪符になっていった観もある。球体関節人形の「少女」観にもその影響は色濃く残っているようだ。

しかし日本の球体関節人形の発達に寄与した重要な作家は、皆、戦後育ちである。そして天野可淡、恋月姫などビックネームの作家にもその愛好家にも女性が多い。四谷シモンも異性愛男性の欲望を基準に作品を創作してきたわけではなかった。それゆえ、異性愛の男性の欲望が直接反映しているのは作品ではなく、それを論じることばの方だったのかもしれない。球体関節人形をめぐる

評論やエッセイは男性によって多く書かれている。とすると、女性の人形作家は異性愛の男性の欲望に応える異性愛の女性として少女人形を創作してきたのだろうか。たしかにその側面はあったのかもしれない。しかしもしそれだけならば多くの女性たちが熱狂的なファンになることはなかったのではないか。

カリスマ的に愛され早逝した天野可淡について、生前の彼女を知っている女性のなかには、その中性的な魅力を語る人がしばしばいたという。たとえば彼女の人形のモデルをつとめた三浦静香は天野について「パティ・ミスみたいに、中性的で。ボーイッシュなところ」があったと語り、画家の吉田キミコは「彼女はジェーン・バーキンにも似て、イザベル・アジャーンにも似てるんですよ、ムードがね。少年っぽい女の人だったというように」と回想している。女性同士の語りのなかにこうした同性への憧れが現れることは珍しいことではない。そもそも近代日本の「少女」文化には「エス」という言葉に代表されるように同性愛的傾向が色濃く見られた。戦前の女子教育の副産物として、若い女性同士のロマンティックかつプラトニックな愛の関係を称揚する独特の文化が花開いていったことはよく知られている。「少女」文化は家父長制社会の副産物ではあるが、そこからの一時的な避難所という側面も持っていた。いわば女性たちが自分たちの愛や欲望を静かに醸成できる限られた空間だったのである。少女人形を愛好する人々はその時空間を再現しようとしているとも考えられよう。

男女を問わず、人間の最初の愛の対象は母である。人形遊びには自らが母のように人形を扱う能動的な楽しみもあるし、自分自身への慈しみを母の眼差しを通して再現する喜びもある。球体関節人形はその可動性が特徴的だが、異性愛男性の欲望の対象としてそれを扱うならば、極限まで受動的な存在ともみえようが、それを自分自身の身体のように、あるいはすでに失われた最初の愛の関係の再現として、能動的に扱うならば、それは自由な欲望を飛翔させる媒体となるかもしれない。その意味で日本の球体関節人形は両義的であるといえそうだし、この両義性は、日本の男女関係の現状をさまざまな意味で反映しているのかもしれない。

榊山裕子（芸術批評、ジェンダー・セクシュアリティ論）

第2回 My・クリエイティブドール展

REPORT

7月22日～7月26日 横浜みなとみらいギャラリー

創作ビスクドールの第一人者三輪輝子さんが主催する公募展。第2回目の開催はコロナウィルスの影響による緊急事態宣言のため4月の予定を7月に変更して行われました。それでもまだ緊張が残り、宣伝を積極的にできない状況で、大竹京さんをはじめとする協力作家たちの応援を得て開催にこぎつけました。その甲斐あって約 1000 人の来場者が訪

れました。また会期を延期したため、応募者の作品の仕上がりのレベルがあがった印象があったそうです。人形を作る人、見る人を育てたい、人間にかかわる全てを凝縮した創作人形の世界を多くの人に伝えたいという三輪さんの思いで行われたこの公募展の次回開催は、1～2年後を予定されているそうです。



グランプリ 綿花よあん



準グランプリ 花森あん



招待作家 大竹京



主催作家 三輪輝子

ピグマリオン人形展 2020

REPORT

8月5日～8月16日 FEI ART MUSEUM YOKOHAMA

7年ぶりの「ピグマリオン人形展 2020」はコロナ禍の中、徹底した感染防止対策の上開催されました。ご来場頂いた方々から、個性溢れる作品の集結…と SNS で多くの称賛を頂きました。これも各自の個性を

伸ばしてくださる吉田先生の指導力の賜物です。人形展で得た熱い心を胸に生徒同次のステップに向かうことでしょう。

水澄美恵子（人形作家・ピグマリオン講師）



吉田良



水澄美恵子



林美登利